書見台

スペイン国立図書館利用体験記

井　上　泰　山

一　はじめに

関西大学によって平成17年度調査研究員の資格を与えられた私は、４月から９月までの半年間、スペインとポルトガルを中心に、各地の大学図書館をはじめとして、その他の公共図書館や公文書館、王宮内の図書室や修道院の図書室などを訪れ、漢籍の所蔵調査を行った。漢籍の調査ならば中国や台湾に行けばよいものを、何故わざわざイベリア半島まで足を運ぶ必要があるのか、疑問に思われる向きもあるやもしれないので、まずこの点について少し説明しておく必要があろう。

東西交渉の歴史に関する研究は日本においても早くから手がけられ、特に両者の文化交流の歴史とその様相については既に多くの研究成果が積み上げられてきている。その象徴的な例として、20世紀初頭に発見された敦煌文書が、様々な経緯を経て西洋に渡り、フランスやイギリス、あるいはロシアなどの図書館に保管されることになったことは特に有名である。中国の文化遺産が陸路を経て西欧諸国に流れ込み、本場中国以外で保存されることになった典型的な例として挙げられるが、実はそれ以前にも、既に早くから書籍を含む中国の様々な物品が西欧諸国に流入していた。一例を挙げるならば、かつて16世紀半ばに中国で印刷された明代の長編小説『三国志演義』の古版本は、東洋で布教活動を行っていたイエズス会の宣教師の手を介してスペイン国王・フェリーペ二世のもとに送られ、当時建造されたばかりのエスコリアル修道院の図書室に入り込んで、その後450年間にわたって眠り続けることになった。しかし、該書が刊行された明代以降、小説や戯曲などのいわゆる通俗文学を軽視し排斥する風潮が、知識人の意識の中で長く続いたため、それらを保存する環境が整うはずもなく、結果的に中国本土ではいつの間にか失われてしまい、逆に西洋に渡って保存されることになったのである。かつて平成６年度に在外研究員としてスペインに調査に赴いた私は、いくつかの偶然と幸運に支えられてその貴重な版本に巡り会い、マイクロフィルムを本学に持ち帰って出版することができた（『三国志通俗演義史伝』上下二冊、関西大学出版部）。当時は時間的制約もあり、『三国志演義』以外の漢籍についての詳しい調査はできないままに帰国せざるを得なかったが、その時の調査によって、イベリア半島各地には中国から流れ込んだ書物がまだ他にもかなりある、との感触を得ることができ、かねてより再調査の機会を窺っていたところ、調査研究員として再度イベリア半島に赴く機会を与えられ、そんな経緯から今回の継続調査へとつながった次第である。

図書館遠景

さて、前置きが長くなったが、そろそろ本題に入ることにしよう。今回イベリア半島で漢籍調査を行うにあたっては、事前にできるだけ関連情報を集め、

幾つかの拠点となる調査対象機関を選定した上で臨んだ。標題に掲げたスペイン国立図書館はその中の重要な拠点の一つとして位置づけていた。かねてより、スペイン国内の最も重要かつ主要な図書館としての評価が定まっているからである。ただ、漢籍調査という点に関して言うならば、実はこの方面に関する研究は未開拓の部分が多く、先学の調査報告が一部備わってはいるものの、情報はまだ充分には開示されておらず、ある種の勘を頼りに自分で足を運んで確かめる以外に有効な方法はない、というのが正直なところである。従って、期待して実際に訪れてみても肝心の漢籍が全く無かったり、あるいは管理が充分でなく目録が完備していないため、所蔵の有無そのものが判断できない場合もある。その意味で、極端に言えば、調査がスムーズに進行するかどうかは全て神頼み、といった側面もないわけではないが、しかし、ことスペイン国立図書館に関する限り、調査は徒労に終わることなく、逆に予想していた以上の成果を収めることができたのは幸いであった。

専門分野に関しては、既に本学の学術誌『中国文学会紀要』第27号にその成果の一部を発表した他、今後も機会を見て随時公表していく予定であるので、必要ならばそちらをご覧いただくとして、今回ここに報告する内容は、調査の過程で体験し理解し得たスペイン国立図書館そのものの概要を、特にその理念とサービスに重点を置いて紹介しようとするものであり、いわば一利用者の目から見た現状を報告しようとするものである。今後実際に当該図書館で書籍調査にあたる場合はもちろんであるが、それ以外にも、例えば今後の図書館サービスのあり方を考えるためにも、何らかの参考になれば幸いである。

二　スペイン国立図書館の概要

はじめにスペイン国立図書館（以下「国立図書館」）についてのおおまかな輪郭をつかんでおくことにしよう。ここに記す情報は、同図書館が利用者向けに配布しているパンフレットに記載されているもので、スペイン語版と英語版の二種類が用意されているが、ここでは後者に基づいて、その歴史や収書の経緯、蔵書の特徴やサービス内容などを概観しておくことにしたい。ただし、先にも述べたように、本稿の目的は、単に表向きに提供されている宣伝文句を紹介することではなく、あくまでも実際に利用する者の視点に立って全般的な国立図書館の環境を伝えることにある。よって、以下に要約する内容は本稿の導入部分にあたるものとお考えいただきたい。

【歴史的継承（国立図書館の前身）】

1711年の暮れに、イエズス会の宣教師であり国王フェリーペ５世への懺悔聴聞司祭でもあったロビネットが、王室公共図書館（Biblioteca Real Publica）創設のプランを提出した。それは1712年の３月に８千点の物品とともにオープンしたが、その中には、写本や様々な数学用の機器や大量のコイン、メダル、骨董品なども含まれていた。前世紀に来源を持つ、いわゆる「皇后の図書館」の所有であった６千点の書籍も、フランスから運び込まれてコレクションに加えられた。

国王は、出版業者や著者、あるいは書籍販売業者など、およそ印刷に関わる者全てに対して、スペインで印刷された全ての書物についてはそのコピーを一部提出するようにさせるシステムを作り上げた。それは今日の法的寄託制度（出版物のコピーを一部提出させること）の前身となるものであった。数年後には、宮殿公共図書館に対して、競売にかけられたあらゆる書籍を自由に購入することを保証することになり、そのシステムは確立された形となった。その後、外国の書物を定期的に獲得することによって蔵書数は徐々に増加していったが、蔵書の数が圧倒的に増えたのは、いくつかの図書館の蔵書を強制的に没収したからであった。そうした蔵書のうちの代表的なものとしては、1712年に獲得された大司教カルドナのものや、メディナセディ、サルセド、ミランダ、あるいはカーディナル・アルキントスのものなど、チャールズ３世の命令によって獲得されたローマからのコレクションなども含まれていた。1836年、図書館は王室の財産から切り離され、国の所有に帰した。国立図書館（La Biblioteca Nacional）の名が与えられたのはそれ以来のことである。

【拠　点】

国立図書館が最初に設置される予定であったマドリッドのアルカサル（城塞）は、ナポレオンの時代に破壊されてしまい、書物は何度も移動することとなった。19世紀の間、書物が継続的に増加したため、最終的な拠点を見いだす必要に迫られた。1866年、現在の拠点（いまやそれはマドリッドでも有数の典型的な建物である）を建築するための最初の工事が

レコレトス界隈（Paseo de Recoletos 20）で開始された。1892年、アメリカ大陸発見から４世紀を経た記念すべき日にそれは開館し、王宮図書館、古文書館、国立美術館として構想されたものである。2000年、セキュリティシステムと新たな技術を備えた形で、図書館再編成の仕事は一つの区切りを迎えることとなった。

国立図書館の二番目の拠点となるアルカラ・デ・エナーレスの保管場所は、1993年から既に機能している。それは８つのモジュールから成り、150万件の文書を保管するスペースを有している。

【蔵　書】

19世紀、図書館が所有することとなった多くの古典関係の貴重な書物は、押収、購入、あるいは寄贈といった様々な方法により収集された。マドリッド地方の24の修道院が閉鎖され、そこに保管されていた７万点の書物が到来することにより、新たなスペースの問題が生じることとなった。その中には、アヴィラの教会にあった312点の価値あるコレクションや、ブラガンサのセバスチャン王のコレクション（144点の抄本、68点の初刊本、1825点の印刷物、などを含む）、ヴァレンティンカルデデラのコレクション（７万点以上の挿し絵やデッサンを含む）、アラビスト･パスケル･ガヤンゴスのコレクション（１万８千点の印刷物と1155点の抄本を含む）、オスナ君主のコレクション（6500点の印刷物及び豊富な写本類～その中には華麗なイラストのついた古写本もある～）などがある。

いくつかの重要な寄贈についても言及しておかなければならない。例えば、極めて稀な音楽や演劇の見本を含むフランシスコ・アセンホ・バルビエリの寄贈、あるいは、宗教的なテーマに関する書物がその大半を占めるウソス未亡人の寄贈、アフリカとアラブ世界に関する膨大なコレクションであるトーマス・ガルシア・フィゲラスの寄贈、そして最後に、恐らくは市民戦争、フリーメイソン、スペインの政党に関する最もすぐれたコレクションであるところのコミン・コロメールの寄贈などである。

1958年、スペインで印刷された全ての媒体に関して、国立図書館にそのコピーを一部提出することが法律によって義務化された。以来、あらゆる形式の全ての文書が図書館に加わることとなった。現在、書物や定期刊行物をはじめ、地図、楽譜、カセット、コンパクト・ディスク、ビデオ、電子刊行物など、あらゆる媒体が図書館内に収集されつつある。

【職務及び組織】

図書館の職務と組織については1991年10月31日付けの王室典範に定められている。国立図書館は国内における最も重要な図書館組織であり、また、スペイン図書館機構の首位に位置するものであり、それは以下の職務を遂行するものとする。

1　研究・文化・情報に関する、スペイン国内で話される全ての言語によって生み出されたあらゆる媒体（印刷物や写本あるいは書物の形態によらない様々な媒体）のコレクションを収集・整理・保存し、その知識の普及を図ること。
2　収集品に関する助言・貸し出し・再生を通じて、基本的に人文学の分野における研究を促進すること。
3　スペイン国内の出版状況に関する情報を発信し普及させることによって、法的寄託についての綿密な点検と監視をおこなうこと。
4　図書館学・書誌学の分野並びに文献学的遺産の保存・増大・普及に関する、国家の行政単位によって委任された査定と教育上のサービスを提供すること。
5　他の図書館及び文化的科学的組織との研究協力計画を推進し、その業務を改善するのに役立たせること。
6　職務範囲に属すると考えられる分野における研究開発計画を遂行し促進すること。

国立図書館は独立した組織であるが、所属としては、教育・文化・体育省に属している。主な管理主体と顧問は、国王並びに王妃を名誉総裁とする王室顧問団（Real Patronato）が行い、そこには11人の名誉会員及び最高15人の付加的メンバーが加わることになっている。

【サービス】

国立図書館は個人と組織を適切に配置することによって広範囲のサービスと情報資源を提供している。例えば、閲覧室、出版予約、事前の問い合わせへの対応、一般的ないし専門的な文献学的情報の提供、図書館間の貸し出し、収集物の再生、遠隔地からのデータベースに関する相談、文献学的記録の分類、などがそれである。それらは個人が図書館で直接行

うこともできるし、インターネットによって遠隔地から行うことも可能である。図書館のサービスはその他の広範囲な文化的広報活動によって補完されている。それは様々な領域にわたり、例えば、書籍博物館での恒常的な展示や、臨時に企画された一時的な展示、あるいは、その他の文化的活動または図書館独自の出版活動などである。

筆者とスペイン国立図書館前景

以上が、国立図書館の側から外部に向けて発信されている情報の概要である。「サービス」の項目にもあるように、同図書館にはインターネット上にホームページも開設されており、そこにアクセスすればより詳しい状況を知ることもできる。興味のある方は是非そちらもご覧いただくとして、ここでは早速、一人の利用者として実際に国立図書館に足を踏み入れて見ることにしよう。

三　国立図書館の所在地及び周辺の環境

国立図書館はコロンブスのアメリカ大陸発見を記念する銅像の立つコロン広場の東南角地にあり、正式な所在地は、パセオ・デ・レコレトス 20（Paseo de Recoletos 20）である。マドリッド市内を南北に縦断して走る幹線道路カスティジャーナ通りとレコレトス通りとの接点にあたる場所がコロン広場であり、そこから少し南に下るとプラード美術館や広大な面積を誇るレティーロ公園にたどり着く。マドリッドの南の玄関口アトーチャ駅からも近い。いわば市内の一等地に位置していることになる。

国立図書館は国立考古学博物館と同じ建物の中にあり、両者は背中合わせに建っている格好である。後者は高級ブランド店の立ち並ぶセラーノ通りに面している。前章の「概要」にもあったように、この場所で国立図書館建設のための工事が開始されたのは1866年、正式に開館したのは1892年ということであるから、この地における開館の歴史としては、既に115年を数えたことになる。

このように市内の中心部に位置しているため、アクセスのための交通機関も整っている。市バス、地下鉄、電車のいずれをも利用することができ、下車した後、歩いて３分以内に図書館の玄関にたどり着くことができる。図書館の建つ敷地は周囲を石造りの高い塀が囲んでいるが、レコレトス通りに面した図書館の表玄関は頑丈な鉄格子になっているため、外部からもその全貌を見晴らすことができ、圧迫感を感じさせない。図書館の建物は地上３階、地下１階。階数的にはそれほど高層の建物ではないものの、各階の天井までの高さが相当に高いため、正面から眺めると、それは見上げる程に高い。

一般利用者用の入り口は１階にあるのだが、スペインでは通常１階部分を０階と表示するため、日本の感覚でいうと実際には２階部分に入り口があることになる。そこで、入り口にたどり着くためには、まず正面の玄関にある石造りの階段を２階まで上って、そこから館内に入ることになる。ただ、階段の部分には『ドン・キホーテ』の作者として有名なセルバンテスをはじめ、サン・イシドロやアルフォンソ・エル・サビオなど、合計６人の賢人たちが書物や剣を手にして待ち構えているので、そのまま素通りせず、入館前に一言「オーラ（こんにちは）」と声をかけておくのも悪くないであろう。

四　入館手続き

さて、ガラス製のドアを開けて館内に足を踏み入れると、まずは左手にあるセキュリティコーナーで所持品の検査を受けることになる。カバンはもちろんのこと、時計や財布、鍵など、全ての持ち物をＸ

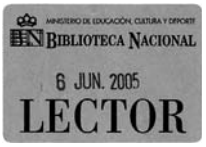
線で透視された後、本人自身もチェック用の小門をくぐってブザーが鳴らなければ、そこで初めて入館が許可されることになる。うっかり小銭などの金属物をズボンのポケットに入れ忘れていたりすると、監視用のブザーがビーッと鳴り響き、いかめしい顔つきをした検査員にジロリと睨まれることになるのだが、そんな時は、慌てずゆっくりと持ち物を点検し、「ペルドン（すみません）」と一言声をかければ、相手も「ナダ（いやいや）」と笑顔で答えてくれるので、それほど恐れる必要はない。

チェックが無事済んだならば、初めて訪れる利用者はまず左手にある総合受付で利用のための手続きを行うことになる。利用者の区分は２種類あって、当日一日だけの臨時利用と、一定期間継続利用する場合とに分かれている。国外からの利用者の場合、継続利用するためには、パスポートの提示を求められる他、利用目的や職業、所属機関（勤務先）それにスペイン国内の住所など、幾つかの項目にわたって必要書類に詳細に記入するよう求められた後、カラー写真２枚を提出すると、およそ10分程度で顔写真入りの身分証明書を作って手渡してくれる。ただし、手続き料金は一切必要ない。しかも、私の場合、特に要求しなかったにもかかわらず、いきなり５年間有効の証明書を渡されたところを見ると、研究者に対してはかなり優遇措置が図られているように見

入館証明カード（5.5×8.5㎝）

受けられる。５年間一度も更新することなく継続して利用できるとなると、今後毎年のようにスペインを訪れて相当綿密な調査を行うことができる。利用者にとってみれば、これほどありがたいことはない。

利用者用証明書が発行されても、それで入館手続きが全て終了するわけではない。いったん玄関口までもどって正面をまっすぐ進むと左手に手荷物を預けるコーナー、右手には自動式のコインロッカーがあり、いずれかの場所でカバンやバッグなどの袋物を預けなければならない。ノートや筆記用具、ファイルなどの他、ノートパソコンなども持ち込めるが、全て外部から見えるような形にしておく必要がある。手荷物類を預けて三角錐型のドアを手前に引いて更に一歩奥へ進むと、左手に係員が待ち構えていて、またしても持ち物のチェックを受けることになる。ファイルに挟んだ用紙やパンフレットなど、かなり念入りに検査され、問題なしと判断されると、閲覧者用の小さなシールを１枚渡される。館内にいる間



（５×3.5㎝）

（５×4.5㎝）

は、赤や黄色、青、緑など、曜日ごとに色の異なるそのシールを、常に体のどこかに貼り付けておくことが義務付けられているのである。こうした幾つかの念入りな事前チェックを受けて初めて、晴れて利用者になれるというわけである。最初このシステムを体験した際には、犯人扱いされているようで、正直なところあまりいい気はしなかったのであるが、最近の不穏な世相を思えば、安全確保のためには一定程度管理を強化しなければならないのも道理のあることで、利用者側としてもある程度の窮屈は我慢しなければなるまい、と思いなおすことにした次第である。ともあれ、ここまでくればもう一安心。これから先は自由に館内を動き回ることができるのだが、その前に、館内のおおまかな様子を各階ごとにつかんでおく方が便利であろう。海図を持たずにいきなり航海に出るのは、あまり得策とは言えない。

五　館内の設備

既述の如く、国立図書館の建物は地上３階、地下１階建てである。建物全体は北棟と南棟とに分かれている。はじめに南棟を下から上に順次概観していくと、まず地下にはカフェテリアがあり、１階部分には会議室と「ゴヤの部屋」がある。２階にはコピーやマイクロフィルムの申し込みを行う部屋と「セルバンテスの部屋」が、また３階には「バルビエリの部屋」がある。続いて北棟に移って、１階には展示コーナー、２階には総合受付コーナーの他に目録

室があり、３階には出版関係の部屋やマイクロフィルムの再生室などがある。また、建物の中央部２階、すなわち玄関の入り口を入った奥には「一般者用閲覧室」があり、３階は吹き抜けになっている。総合受付のカウンターで配布される館内設備に関するパンフレットを見る限りでは、およそ以上のような情報が記載されているのであるが、これらはあくまでもおおまかな見取り図であって、箇々の部署の様子については、やはり実際に足を運んで利用してみないことにはわからない。また、個人の利用目的如何によって、見えてくる状況に微妙な変化が生じることもあり得る。私の場合、漢籍所蔵調査という明確な目的を持って利用したので、ここでもそうした視点からの体験談になることを予め断っておきたい。

セルバンテスの生家

六　セルバンテスの部屋

館内は利用目的に応じて一般閲覧者用の部屋とそれ以外の部屋とに分かれている。前者の場合には、一般参考書や辞書などが開架式書架に収められた「一般者用閲覧室」を利用し、やや専門的な調査を行う場合には「セルバンテスの部屋」もしくは「ゴヤの部屋」と名づけられた場所に行くことになる。両者ともに専門的な書籍を保管してはいるが、その違いがどこにあるかといえば、「ゴヤの部屋」には絵画や写真、デッサンなど、図像を含む資料が収められているのに対し、「セルバンテスの部屋」の書籍はそうした図像の類を含まない純粋に文字だけの書物を収納している。「ゴヤ」や「セルバンテス」など、閲覧室にスペインの著名な芸術家の個人名をつけるところなどは、いかにも芸術の国らしい。

既述の如く、「セルバンテスの部屋」は南棟の２階にある。コピー室やマイクロフィルムの申請室など、「再生室」と呼ばれる一角を通り抜け、自動販売機のある休憩コーナーを過ぎてさらに進むと、突き当たりが「セルバンテスの部屋」である。ドアを開けて中に入ると、右手（西側）が目録室、左手（東側）が閲覧室になっている。目録室には木製のケースに書籍や写本の目録が収納してある他、パソコンも数多く設置してあるので、閲覧したい対象の請求番号はここで調べることになる。

次に閲覧室であるが、こちらは内部が更に３つの部屋に分かれているので、本稿では便宜上、入り口に近い順に、第一の部屋、第二の部屋、第三の部屋と呼ぶことにする。３つの部屋はいずれも基本的に閲覧用の部屋であることに変わりはなく、どの部屋にも閲覧用の机と辞書や目録などの参考図書が開架式に配備してあるのだが、人的配置の面から見ると、第一の部屋には女性警備員だけが常駐しているのに対し、それ以外の部屋には司書が一人ないしは二人、専用デスクの前に座って利用客の要求に対応している。備品としては、第二の部屋には検索用のパソコンが４台、第三の部屋にはマイクロフィルムの再生機が４台設置してある。また、第一の部屋と第三の部屋の周囲の壁には各々８枚の油絵が掛けられている。係員に問い合わせたところ、それらは全てセルバンテスの名作『ドン･キホーテ』の内容に関連する場面を描いたものであり、スペイン人画家ムーニョス・デグライン（1840－1924）の作品である、とのことであった。なお、セルバンテスと『ドン・キホーテ』については後に改めて触れることにする。

さて、「セルバンテスの部屋」の内部を概観した

ところで、早速、実際に書物を閲覧してみることにしよう。閲覧室を利用するには、まず最初に第三の部屋の受付に行く必要がある。係員に利用者証を手渡すと、それと引き替えに数字の入ったプレートを渡される。その数字は閲覧用の机の番号と一致しているので、机の上部に貼り付けてある同一番号を探して、そこに腰掛けることになる。つまり、閲覧室は全て指定席になっているのである。「セルバンテスの部屋」の机の総数は48台。先着48名様までが優先的に閲覧室を利用できるというわけである。48という数字は少なすぎるようにも思われるが、私が通った日々に関する限り、満室で入れないというケースは一度もなかった。ただし、週の初めは比較的混み合うようで、開館時間９時に合わせて早めに入館しないと閲覧までに相当時間がかかることもありうるので、その点は注意すべきであろう。

机の形状についても触れておこう。四角い机の大きさは縦91センチ、横140センチであるから、一人分としてはかなり広く、大型の書籍や持ち込んだ資料などを同時に広げるだけの充分なスペースがある。この点がまず有り難いが、それだけでなく、机の表面が水平でなく、手前に微妙な角度で傾斜しているため、書籍の文字が無理のない自然な角度で目に入ってくる。つまり、上部が高く、下部が低い、傾いた机なのである。余談ではあるが、それを見た私は、以前訪れた南方熊楠邸の書斎にも四本足のうちの手前の二本を切り取って短くし、わずかに傾斜させた机があったことを思い出した。手前に傾斜しているとなると、エンピツなどの丸いものは横に置くとコロコロと転がって手前から床に落ちてしまうのではないかと心配される向きもあるやもしれないが、そこは良く考えたもので、鉛筆類転落防止用の止め板が机の手前の部分に設置されているので、何も心配はいらない。

自分専用の机を確保した後は、いよいよ目当ての書物の請求手続きに入ることになる。先述の如く、目録コーナーは閲覧室とは別に設けられているので、まずはそちらで書籍の請求番号を確かめる必要があるが、私の場合は、予め受付の係員に漢籍の有無を尋ねたところ、ただちに開架式書架に収納してある漢籍目録の位置を指示され、その目録の中に書名とともに請求番号も同時に記載されていたため、自分で検索する手間が省け、大いに助かった次第である。請求番号を確かめた後は、備え付けの請求用紙に書名、著者名、請求番号などとともに、自分の机の番号を書き込み、係員に手渡し、机にもどってしばらく待っていると、係員が書庫に入って請求資料を探しあて、机まで運んで来てくれる。一度に請求できる書籍は３冊までである。

当然のことながら、待ち時間はその日の混み具合と関係してくる。通常であれば請求後10分も経たないうちに本が運ばれてくるが、月曜日や火曜日の午前中などは比較的利用者が多いため、20分以上待たされることもしばしばである。そんな事態を予測してのことであろうか、請求用の小さな白いカードと同時に、実はもう１枚、Ａ４サイズの用紙を渡され、閲覧した書籍の名前を次々に自分で書き込むようになっている。用紙の記入欄は15行しか無いため、仮に15冊閲覧し終わると、別の新たな用紙を請求することになるが、その段階で閲覧がストップされることもある。つまり、当日の混雑度に応じて、司書が適当に利用制限を行うための判断材料になっているのである。

閲覧手続きに関してもう一つ気付いた点があるので、ついでに書き留めておこう。それは、請求用紙に先程述べた必要事項を記入した後、直接それを第三の部屋の受付に持っていくのではなく、予め第二の部屋の司書に見せ、司書のサインをもらわなければならないことである。サインがあって初めて第三の部屋の係員が受理するしくみになっているところを見ると、資格あるいは権限の上では、第二の部屋の司書の方が格が一段高いらしい。つまり、第二の部屋の司書が承諾しない限り、目当ての書物は閲覧できないのである。また、これは長期間連続して利用して初めてわかったことだが、第二の部屋の司書は交替で勤務にあたるらしく、毎日のように異なる司書と対面することになるが、彼女たちはその誰もが、スペイン語以外に必ず英語かフランス語を話すことができる。英仏両言語を話せる司書もいるのかもしれないが、大抵の場合、どちらか一つに限られるようである。つまり、第二の部屋の司書の椅子に座るためには、母国語としてのスペイン語以外に英語かフランス語のいずれかの言語に堪能であることが能力として求められているものと思われる。スペイン国内における司書の養成と資格に関する知識に欠けるため、確かなことは言えないが、利用者の立場から眺めた限りでは、そのように判断される。一方、第三の部屋の司書に関して言えば、残念ながらこちらが英語で話しかけても全く反応はなく、フランス語で応対する司書にも出逢っていない。

さて、目当ての書籍が運ばれてくれば、後は心ゆくまで自由に閲覧すればよいのであるが、ここで付け加えておきたいことは、各人の机の下には専用の電源コンセントが配備してあり、利用者は持ち込んだパソコンを稼動させて、当該書籍の情報を自由に取り込むことができる、という点である。実際、パソコンを利用している人はかなりの数に上り、ソニーや東芝など、馴染み深い日本のメーカーの名前が入ったパソコンを使用している人も多く見かける。私自身は必要な情報を手書きによってカードに書き込み、帰宅後にパソコンに入力するという方法で充分対応することができたが、入手する情報の内容によっては、その場でパソコンに直接情報が取り込めれば、至って便利であることは疑いない。ハイテクの設備に関しては、他の西欧諸国同様、ここスペインでも相当進んでいるように見受けられる。

ところで、閲覧に際してもう一つ気付いた事がある。一般的に言って、西洋の書籍は皮表紙のどっしりとした装丁のものが多く、中にはかなり大型のものもある。そのような書籍を閲覧するにあたっては、ページを開くのも一苦労で、年代物の場合、書籍が壊れないように細心の注意を払わなければならない。おまけに、いったん開いたページがそのままの状態で保てれば問題はないのだが、書籍自体が大型である上に背表紙の部分が壊れかかっていたりすると、目指すページを全開できないこともある。そんな時は係員に申し出れば、書籍を載せる大型のクッションを持ってきてくれるので、その上に本を載せれば、書籍を180度全開しなくても閲覧することができる。いわば書籍専用の枕、といったところである。反対に極めて小型の、中国の書籍で言うならば「袖珍本」の場合にも、それなりの閲覧用グッズが用意されている。極小の本の場合、めざすページを開けても、そのまま机に置くことができないことがある。ページが自然に閉じてしまうからである。そんな時に登場する便利グッズが「数珠」である。丸く閉じたままのものや、ひも状になったものなど、形状は様々であるが、それを開いた小型本の上に寝かせて、適度の重しとしての効果を期待するのである。仏教国の感覚からすれば、数珠を本の重しにするなどとんでもない、ということになるのかもしれないが、その点、ここスペインはカトリックの国であるから、そんなことはお構いなし。要は開いた書籍が閉じなければそれでよいのである。所変われば品変わる、とは、言い古された格言であるが、ことスペイン国立図書館に関する限り、所変われば用途も変わる、といったところであろうか。

さて、最後に、複写サービス及びマイクロフィルムの申請について述べておこう。当該資料に関する一部または全部の電子複写を申請する場合には、まず、第二の部屋の司書に相談しなければならない。目当ての資料を持参して、それが電子複写に耐えうるかどうかを判断してもらわなければならないのである。仮に許可が出れば、「再生室」に資料を持ち込んで自分で複写することになる。複写機は５台設置されているので、受付でコピーカードを買い、任意の機械を操作してコピーを作成すればよい。ただし、終了した後は再び資料を「セルバンテスの部屋」まで持ち帰らなければならない。

次に、マイクロフィルムの申請に関してであるが、こちらは専用の申し込み用紙に書名や請求記号の他、住所や連絡方法なども記入した上で、自分で必要な部分を指定し、総ページ数も計算して提出しなければならない。この場合もやはり、第二の部屋の司書に伺いを立て、許可を得なければならない。重要事項に関する決裁は全て第二の部屋の司書を通す格好である。サインをしてもらったならば、やはり「再生室」の当該コーナーに書類を持ち込んで料金を計算してもらい、必要な金額を支払えば、全て完了。控えの用紙を１枚渡されるので、後日それを持って受け取りに行くことになる。明確な受け取り日を指定されないのが不安ではあるが、通常の場合、１ヶ月か２ヶ月もすれば受領できるようである。この点はいかにもおおらかなスペイン時間が生きている感じがする。

七　ゴヤの部屋

「ゴヤの部屋」は南棟の１階にあり、位置的には「セルバンテスの部屋」の真下にあたる。既述の如く、「ゴヤの部屋」には文字以外の視覚情報を含むあらゆる資料、すなわち、絵画や写真をはじめとして、図面や地図、デッサン、絵入りのパンフレットなど、様々な様式の資料がそこに収納されている。私の調査に関して言えば、古典関係の漢籍の中には、世界地図や人物の図像などが含まれている場合がある。また、特に美術品関連の書籍の場合には、大半が図版で占められている書籍もある。そのような書籍を閲覧する際には、たとえそれが書籍の形態をとったものであっても、収納場所は「ゴヤの部屋」という

ことになり、そこに足を運ぶことになるのである。実際の書名で言うならば、例えば明代の長編小説として日本でもお馴染みの『西遊記』の中国語による原本を閲覧する場合、仮にその中に挿し絵などが含まれていれば、「セルバンテスの部屋」ではなく、「ゴヤの部屋」にある、といった具合である。

さて、ここで「ゴヤの部屋」の概観を紹介しておくことにしよう。各種の目録ケースや指定席用の机、それにマイクロリーダーなどが設置されている点は「セルバンテスの部屋」と基本的に変わらないものの、規模的にはこちらは一回り小さく、机の数は25台しかない。開室時間帯に関しても、「セルバンテスの部屋」が朝の９時から夜の９時まで開いているのに対し、こちらは夜の７時で閉室してしまう。また、担当する司書の都合によってサービス時間帯が短縮されることもあるようで、曜日によっては午前中で終わってしまうこともある。利用者も相対的に少ないせいか、こちらはパンフレットに記載されている時間帯があまり厳密に守られていないように感じる。ただ、図像資料を収納しているせいか、マイクロリーダーの数が多く、合計８台も設置されているため、順番待ちする必要もなく、大抵の場合、見たい時にマイクロ資料を閲覧することができるのはありがたい。さらに、これは言うまでもないことであるが、「ゴヤの部屋」の周囲の壁には大小様々な18枚のゴヤの作品が掛けられ、利用者の挙動を静かに見守っている。

コピーやマイクロの再生を申請する場合も、その手続きは「セルバンテスの部屋」で紹介したのと同様の手順を踏んだ後、１階まで上がって「再生室」で申し込むことになる。

ただし、「ゴヤの部屋」の資料に関しては専属の司書がいるため、わざわざ「セルバンテスの部屋」の第二の部屋まで行って司書に伺いを立てる必要は、勿論ない。

八　一般閲覧室

一般閲覧室は２階の入り口を入った正面にある。ここは「セルバンテスの部屋」や「ゴヤの部屋」と違って格段に広く、天井も見上げる程高い。机の数も合計308台ある。天井はガラス張りの吹き抜けになっており、天候が悪い時など、落下する雨滴の音がかなり激しく聞こえたりする。周囲の壁は全て開架式の書籍で覆われており、利用者は必要な時に自由に手に取って閲覧することができる。利用手続きは、既に紹介した二つの部屋と同じく、まず受付に行って専用の机を確保し、閲覧したい書物の名前と請求記号を書いたカードを指定されたボックスに投入しておけば、手の空いた係員が書庫に入って当該資料を出してくれる。ただし、その場合、「セルバンテスの部屋」や「ゴヤの部屋」と違って、係員が机まで書籍を運んで来てくれるわけではなく、机の上部に設置された小さなランプが点滅した時点で自分で受付まで行って書籍を受け取ることになる。こちらは利用者の人数が多いだけに、いちいち運ぶとなると大変な人手が必要となり、事実上困難であると思われる。開室時間帯は朝９時から夜の８時まで。土曜日も午後２時（スペインの感覚では午前中にあたる）まで開いているのがありがたい。

九　その他の設備

以上、私が実際に利用した３つの部屋に関して、理解し得た範囲でそのおおまかな環境を紹介した。パンフレットにも記載されているように、図書館内には他にも映像資料を収納する部署やマイクロフィルムの再生室などもあるようだが、詳しく紹介する材料を持たないので、残念ながら割愛せざるを得ない。ここでは、館内の付属設備、例えば、地下にある食堂や書籍販売部、展示コーナーなどについて、目に留まった事柄を幾つか紹介しておくことにする。

まずは食堂について。地下１階には利用者用の食堂がある。朝８時から営業しているところをみると、職員の朝食の場としても機能しているようであるが、その時間帯に訪れたことがないので、詳しい状況はわからない。食堂が混みあうのは午後の１時過ぎからで、その時間帯が近づくと、職員も大勢訪れて簡単なつまみや定食の類を注文して空腹を満たすようである。ただし、日本と違うのは、昼の定食にも必ずビールかワインが含まれていることで、大抵の人はそのいずれかを注文してゆっくりと昼食を楽しむ。また、食堂の一角にはカウンター形式の「バル」も設けられており、ガラスケースに入った簡単なつまみ類を注文してビールとともに昼食代わりにする人もいる。日本と比べると昼の休憩時間も長いらしく、２時間余りも延々と話し込んでいく職員もいる。「シエスタ」の伝統を持つ国だけに、時間の流れが日本とは根本的に異なっているのを感じる。料金もかなり低めに設定されており、定食は5.7ユーロ、

日本円にするとおよそ800円程度。この値段で、日替わりの、前菜からデザートまで含んだ相当ボリュームのある昼食を楽しむことができる。

館内には書籍販売部もある。場所は北棟の１階で、そこには入館手続きをしなくても外部から自由に入ることができる。スペースとしてはそれほど広くはないが、国立図書館発行の各種の書籍や目録類を手に入れることができるため、私は何度も足を運んだ。特に、2005年という年は『ドン・キホーテ』の初版が刊行されて以来ちょうど400年目という大きな節目の年にあたるため、初版本の写真を含むガイドブックやセルバンテス関連の書籍の他、各種の記念品が多数店頭に並んでいた。

最後に特別展示コーナーについて述べておこう。先述の如く、2005年が『ドン・キホーテ』誕生から400年目にあたるため、展示コーナーでは1605年の各種の初版本を含め、合計298点の『ドン・キホーテ』を展示していた。外国語に翻訳された書物としては聖書に次いでその数が多いとされる『ドン・キホーテ』だけあって、世界各国の言語に訳された各種の版本の実物が、三室にわたって展示されていた。もちろん日本で刊行されたものも展示してあり、その中には、1896年に東京博文堂から刊行された松居松葉抄譯の『鈍機翁冒險譚』なども含まれていた。また、中国語訳も展示されており、こちらは年代が新しく、1995年版であった。因みに中国語の書名は『唐吉河徳』、もちろん「ドン・キホーテ」の音訳である。

更に、地下室に足を踏み入れるとコンピュータによるセルバンテスおよび『ドン・キホーテ』の紹介などもあり、様々な媒体を通して記念すべき年を訪問者にアピールしているようであった。

十　おわりに

以上、スペイン国立図書館について、実際に利用した者の立場からその概要の紹介を試みた。部分的にはかなり詳細に状況を報告したつもりではあるが、図書館学の専門家でもない私の目の届く範囲は限られているため、必要な情報が充分に盛り込まれていないかもしれない。また、予め断ったように、今回の私の訪問目的が漢籍の調査に限られていたため、ごく狭い視点からの情報提供に留まっていることも充分承知している。ただ、私個人としては、スペインという体制の全く異なる国における図書館が利用者にとってどの程度のサービスを提供しているのか、かねてより興味を懐いており、スペインの他の公共図書館や修道院図書館の情報開示のあり方をある程度体験してきただけに、首都にあるスペインの最重要図書館の様子を知ることには、それなりの意味があると判断し、今回の報告を思い立った次第である。

歴史も習慣も全く異なる異国の図書館の状況を知ったところで、それがそのまま日本の図書館のあり方に反映されるべきものとも思えないが、よく知られた諺にも「他山の石」という言葉があるように、異質の存在が自らの襟を正してくれることも、場合によってはあり得るであろう。その意味で、今回の私の報告が、書籍を扱う立場にある方々にとって、何らかの参考になれば、それに勝る喜びはない。

〈2005年８月15日、マドリッドにて脱稿〉

（いのうえ　たいざん　文学部教授）